不定語（句）「誰」「誰か」「誰も」について

A Study about Infinitives; *Dare, Dareka and Daremo*

金井 勇人 [i]

KANAI Hayato

（要旨）

本稿では、日本語の不定語(句)の性質について、「誰」「どなた」を例に考察する。不定語(句)は、形態上の観点から、３つに分類できる。「誰」を例にすれば、その３つとは「誰」「誰か」「誰も」である。また不定語(句)の用法も、３つに分類できる。それは「疑問用法」「不定個称」「不定全称」である。さて、この形態上の３分類と、用法上の３分類とは、どのような関係にあるのだろうか。本稿の目的は、「外延」「内包」という観点から、両者の関係を詳細に記述することにある。

キーワード：不定語(句)、疑問用法、不定個称、不定全称、外延、内包

１．はじめに

「誰」「どなた」などの語は、普通「疑問詞」などと呼ばれる。

(1) 「お兄ちゃん、僕だよ。僕だよ、お兄ちゃん」
その子供は、前方から来る鉄兜の青年の前で立ちどまった。青年も立ちどまったが、ちょっとたじろいだ風で、「君は誰ですか」と云った。（黒い雨）

(2) 「山本太郎ですか？ ああいます。どなたですか？ 五月さん？ はい、ちょっとお待ち下さい」
（太郎物語）

(1)(2)は、「誰」「どなた」によって疑問を提起している。この限りにおいて、「誰」「どなた」は「疑問詞」という名称で問題ない。三尾(1979)は、これらを「疑問用法」と呼び、以下の例文を挙げている。

(3) 誰がそんなことを言ったんだ？ [ii]

(4) 私には誰が言ったかわかりません。

(3)は話し手が聞き手に問うタイプ、(4)は話し手が自らに問うタイプだが、「誰」によって疑問を提起するという本質的な機能は変わらない。ただし「誰」「どなた」は、疑問用法としてのみ現れるわけではない。

(5) 誰か来たようだ。

(6) どなたか来たようだ。

(7) 誰もがそう言っている。

(8) どなたもがそう言っている。

---

[i] 埼玉大学 国際交流センター 助教

[ii] (3)(4)(5)(7)は、三尾(1979:73)の例文を引用したもの。また本稿の例文で出典を記していないものは、引用者（筆者）による作例である。

これらの「誰」「どなた」は、疑問を提起するという性質のものではなく、「ーか」「ーも」の形態で、内容を不定としたまま、文の構成要素（ここでは主格）とする。このような性質を鑑みて、「誰」「どなた」および「ーか」「ーも」を、本稿では一括して「不定語(句)」と呼ぶことにする。[iii]

本稿では、三尾(1979:74)にしたがって、これら不定語(句)を以下のように３分類する。

①疑問用法：「誰」「どなた」の形態で、疑問を提起するもの。(1)~(4)
②不定個称：「誰か」「どなたか」の形態で、前提集合[iv]のうちのあるメンバーを指すもの。(5)(6)
③不定全称：「誰も」「どなたも」の形態で、前提集合のうちの全てのメンバーを指すもの。(7)(8)

この３分類は、不定語(句)の主たる用法を的確に捉えている。

しかしこれらの分類は、あくまでも用法を基準とした分類であり、形態と用法との関連については、もう少し複雑な様相を見せるものと思われる。そこで本稿では、「外延」「内包」という観点から、上記の３用法と不定語(句)の諸形態との関係を、「誰」「どなた」を例に、より緻密に整理し直してみたい。

２．措定と指定

三上(1953:73-154)は、「ＡはＢだ」という構文には「指定文」と「措定文」がある、と論じている。まず、「指定文」は、ＡとＢの間に“Ａ＝Ｂ”という関係が成り立つものである。

(9) 指定文：太郎君はあの人だ。

この文では、「太郎君」の内包には立ち入らず、外延的な“identification”を行う。すなわち「太郎君」と「あの人」は外延的に一致する、と認定するものである。

次に「措定文」は、ＡとＢの間に“Ａ≦Ｂ”という関係が成り立つものである。

(10) 措定文：太郎君は学生だ。

述部の「学生だ」は、「太郎君」にとっての属性でもある。つまりこの文は、「太郎君」の内包に立ち入って「太郎君」の“解説”を行うものである。

この指定文と措定文の区別を踏まえて、三上(1953)は、疑問詞（不定語）と指定・措定との関係について次のように述べている。

(11) 疑問文の疑問詞は何を予想しているか。何を求めているか。措定を求めているか、指定を求めているかである。「何ダ？」は措定すなわち解説を求めているし、「ドレダ？」は指定を求めている。…（中略）…「誰？」は両方に跨って使われるようである。（三上 1953:49）

[iii] 本稿の関心は、「ーか」「ーも」の形態を含む「不定語(句)」全体の性質にある。したがって「か」「も」の品詞論的な議論は行わない。また「誰か来た」「誰かが来た」の対立に見られるような、不定語(句)に後続する格助詞の有無についても、考察の対象外とする。

[iv] 奥津(1984:2)は「コーヒート紅茶トドッチヲ飲ミマスカ？」において「コーヒー」「紅茶」から構成される集合を「前提集合」と呼んでいる。本稿もそれに従う。また前提集合を構成する各々を「メンバー」と呼ぶことにする。

この三上(1953)の指摘を具体化すると、以下のようになる。

2-1　措定を求める不定語

(12) 措定：これは何ですか。（*何がこれですか。）

この発話では、「これ」によって言及の対象が特定され、述部の「何」は、その解説を求めている。つまり、措定を求めている。したがって、主部と述部を入れ替えることはできない。

2-2　指定を求める不定語

(13) 指定：あなたの車はどれですか。（＝どれがあなたの車ですか。）

この場面では、複数の「車」から構成される前提集合がある。述部の「どれ」は、前提集合から「あなたの車」と外延的に一致するメンバーを求めている。つまり指定を求めている。したがって、主部と述部を入れ替えても、文意を保ったまま適格な文となる。[v]

2-3　両方に跨って使われる不定語

(14) 措定：あなたは誰ですか。（*誰があなたですか。）
(15) 措定：あなたはどなたですか。（*どなたがあなたですか。）

(14)(15)では、「あなた」によって言及の対象が特定される。述部の「誰」「どなた」は、その対象の解説、すなわち措定を求めている。よって、主部と述部を入れ替えることはできない。

(16) 指定：太郎君は誰ですか。（＝誰が太郎君ですか。）
(17) 指定：太郎君はどなたですか。（＝どなたが太郎君ですか。）

一方、(16)(17)では、複数の人物から構成される前提集合があり、述部の「誰」「どなた」は、その前提集合の中から「太郎君」と外延的に一致するメンバーを求めている。すなわち指定を求めている。したがって、主部と述部を入れ替えても、文意を保ったまま適格な文となる。

このように措定・指定という観点から見ると、不定語(句)の各用法が、その指示対象は何かということを基準に、分かりやすい形で再整理されてくる。

３．不定語(句)が扱う２つのレベル

以上の観察によって、不定語(句)は２つのレベルを扱う、ということが分かった。本稿では、各々を「内包レベル」「外延レベル」と呼ぶことにする。図示すると、次のようになる。

---

[v] ただし、不定の要素は主題化できないので、「*どれはあなたの車ですか」は不適格となる。また「どれがあなたの車ですか」においては、「あなたの車」が主題となる（三上の言う「陰題文」に相当する）。

（図１）内包レベル

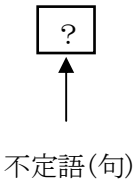
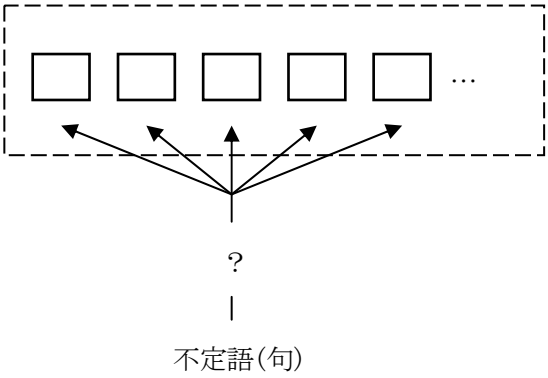


図１は、不定語(句)が□の解説を求めている、という構造を表す。このとき、□の外延は特定されている。不定なのは□の内包である。したがって図１は、不定語(句)が内包レベルを扱うときのモデルである。

（図２）外延レベル



（点線の）大きな長方形は前提集合の全体を表し、内部の（実線の）小さな正方形はメンバーを表す。このとき不定であるのは“どのメンバーを指定するか”ということである。したがって、図２は、不定語(句)が外延レベルを扱うときのモデルである。

(11)で見たように、三上(1953)では“コピュラ文の疑問文”のみに言及している。しかし、措定・指定という概念ではなく、より上位の内包・外延という概念を採用し、また「疑問詞」ではなく「不定語」という立場をとれば、考察の対象を“コピュラ文の疑問文”に限る必要はない。したがって以下では、疑問文以外の動詞述語文（現象文）も、考察の範囲に入れていく。

４．内包レベル

言及の対象が外延的に特定されているとき、不定語(句)は内包レベルを扱うことになる。そのような不定語(句)は、疑問用法・不定個称の２通りに現れる。

4-1　内包レベルの疑問用法

内包レベルを扱う不定語(句)が、疑問用法として現れると、以下のような発話となる。

(1)「君は誰ですか」

(2)「山本太郎ですか？　ああいます。どなたですか？　五月さん？…」

(14) あなたは誰ですか。

(15) あなたはどなたですか。

これらの発話では、「君」「あなた」または文脈によって、言及の対象が外延的に特定される。そして述部の「誰」「どなた」は、その内包についての解説を求めている。したがって内包レベルを扱う疑問用法は、必ずコピュラ文（措定文）となる。

4-2　内包レベルの不定個称

内包レベルを扱う不定語(句)は、「か」を伴って不定個称として現れることもある。

(5)’（先行文脈なし）誰か来たようだ。（≠来たのは誰ですか。）
(6)’（先行文脈なし）どなたか来たようだ。（≠来たのはどなたですか。）
(18) おそらく平地の少ないところだからと誰かが最初に考えついたのであって、べつだん異民族、異文化の所産ではないと思いますけれども。（国家・宗教・日本人）
(19) ドーキンスが、こうやって眉間に手を当ててものを考えながら、黙って廊下を歩いてるわけ。誰かが呼んでも知らん顔して歩いてる。（もっとウソを！男と女と科学の悦楽）

話し手の認識において、言及の対象である「誰か」「どなたか」は、内包は不定とされるものの、“外延的には”特定されている。この認識の構造は、図１と同様のものである。つまり話し手（書き手）は、前提集合を想定していない状態から、言及の対象を一義的に特定するのである。[vi]　したがって、(5)’(6)’は「来たのは誰ですか」「来たのはどなたですか」という疑問を（背後に）持ち得ない。

これらの不定語(句)は、内包を問うているわけではないので、コピュラ文（措定文）として現れることはなく、(5)’(6)’(18)(19)のように、専ら動詞述語文（現象文）として現れる。

これらは、モノを表す不定語「何か」「どれか」と対応関係にある。[vii]

(20)（先行文脈なし）何か落ちてきた。
(21)（先行文脈なし）*どれか落ちてきた。

例えば、突然にモノが落ちてきたとき、話し手は何が起きたのか分からないのだから、前提集合を想定していない（できない）。そのようなとき、内包レベルを扱う(20)の「何か」は適格――落ちてきたモノの外延は特定されていて、そのモノの内包が問題となっている――だが、外延レベルを扱う(21)の「どれか」は不適格となる。

このように考えると、「誰か」「どなたか」には、内包レベルを扱うか、外延レベルを扱うかについて形態的なマーカーがないわけだが、(5)’(6)’のように先行文脈がない場合、それは自ずと内包レベルを扱う不定語(句)として機能する、ということが分かる。

以上から、話し手が前提集合を想定しないとき、不定語(句)は「内包レベルの疑問用法」か「内包レベルの不定個称」として現れる、と結論できる。

そして両者は表裏の関係にある。言及対象の内包を疑問として提起すれば疑問用法となり、それを不定の

[vi] 奥津(1985a:11)では、前提集合が「明示されないからといって、無数の人を前提とするわけでは必ずしもない。状況からして自らその範囲は限られている」と述べられている。しかし重要なのは“前提集合の範囲が限定的か否か”ではなく、発話に際して“話し手が前提集合を想定するか否か”ではないか。

[vii] (11)からも分かるように、「どれ」は外延レベルを、「何」は内包レベルを扱う。このことは、「ーか」「ーも」の形態になっても同様であると考えられる。

まま文の要素として組み込めば不定個称となる、というわけである。

内包レベルを扱う不定語の用法は、次のようにまとめられる。

(A) 内包レベル（前提集合を想定しない）…「何」系

・疑問用法 ―――――― あなたは誰ですか。

・不定個称 ―――――― （先行文脈なし）誰か来たようだ。

５．外延レベル

不定語(句)が外延レベルを扱うとき、前提集合の“どのメンバーを指定するか”が問題となる。このような不定語(句)は、疑問用法・不定個称・不定全称の３通りに現れる。

5-1　外延レベルの疑問用法

外延レベルを扱う不定語(句)が、疑問用法として現れると、以下のような発話となる。

(3) 誰がそんなことを言ったんだ？

(4) 私には誰が言ったかわかりません。

(22) 太郎君は誰ですか。

(23) 太郎君はどなたですか。

これらの発話の目的は、言及の対象を“外延的に”特定することにある。この認識の構造は、図２と同様のものである。

このとき話し手は、明示されているか否かにかかわらず、前提集合を想定している。それは例えば、限りなく無数に近いメンバーから構成される場合もあれば、ごく限定されたメンバーから構成される場合もあるだろう（注vi参照）。[viii] いずれにしても、これらの「誰」「どなた」は、前提集合の“どのメンバーを指定するか”を問題にするわけである。

外延レベルの疑問用法は、必ずしもコピュラ文（指定文）としてのみ現れるわけではなく、(3)(4)のように動詞述語文（現象文）としても現れ得る。

5-2　外延レベルの不定個称

外延レベルを扱う不定語(句)は、「か」を伴って不定個称として現れることもある。

(5)”（数名で待ち合わせ）誰か来たようだ。（⇒来たのは誰ですか。）

(6)”（数名で待ち合わせ）どなたか来たようだ。（⇒来たのはどなたですか。）

(24) 主人の徳兵衛か、妻女か、それとも店の誰かが、――栄二はそう推察したし、いまでもそう信じていた。（さぶ）

(25) 行先は、兵士たちのたむろする場所と決まっていた。だが、出会った兵の中で誰かが彼を認め、スルタンにふさわしいあいさつでもしようものなら、黒人奴隷の大刀が一閃するのだった。

（コンスタンティノープルの陥落）

[viii] 外延レベルを扱うということは、「誰」という不定語が、［(前提集合のうちの）誰］という構造を持っている、ということを意味する。

このとき、話し手は前提集合を想定している。(5)”(6)”では「待ち合わせをしている数名」を、(24)では「店の人」を、(25)では「出会った兵」を、それぞれ前提集合とする。不定語(句)は、その前提集合から“どのメンバーを指定するか”を問題とする。したがって、(5)”(6)”は、「来たのは誰ですか」「来たのはどなたですか」という疑問を（背後に）持ち得る。

ただしこれらは不定個称であって、どのメンバーを指定したかを不定としたまま、文の構成要素とするのである。これは明らかに外延レベルを扱っている。

これらも、モノを表す不定語(句)「何か」「どれか」と対応関係にある。

(26) これらの本のうち、どれか読みたい。
(27) これらの本のうち、*何か読みたい。

(26)(27)の話し手は、「これらの本」という前提集合を想定しているだろう。このようなとき、外延レベルを扱う(26)の「どれか」は適格だが、内包レベルを扱う(27)の「何か」は不適格となる。

したがって「誰か」「どなたか」には、内包レベルを扱うか外延レベルを扱うかについて形態的なマーカーがないが、(5)”(6)”のように、話し手が前提集合を想定している場合、それは自ずと外延レベルを扱う不定語(句)として機能する。

5-3　不定全称

不定全称において、その不定語(句)は、前提集合のうちの全てのメンバーを指す。

(7) 誰もがそう言っている。(⇒そう言っているのは誰ですか。)
(8) どなたもがそう言っている。(そう言っているのはどなたですか。)
(28) おじさんの思いやりに比べ、自分は――と、恥ずかしくなりました。人を外見で判断してはならない。乗り合わせた誰もが、そう感じた出来事でした。(毎日新聞 1999.12.30 朝刊)
(29) ええ。でも、食べて生きているかぎり、直接手を下さないだけで、誰もがみな同じようなことをやっているんですね。(銀色のあしあと)

これらの文では、話し手は前提集合を想定している。全てのメンバーを指すには、どうしてもそれらが所属する前提集合を想定せざるを得ない。したがって(7)(8)は「そう言っているのは誰ですか」「そう言っているのはどなたですか」という疑問を（背後に）持ち得る（もちろんその回答は「前提集合の全員です」というものになる)。

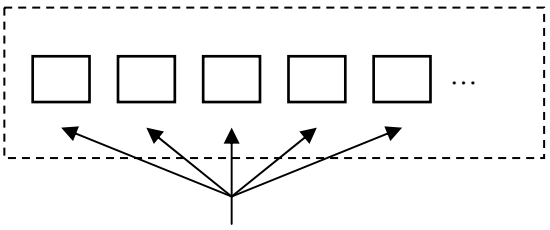
これらも、モノを表す不定語(句)「何も」「どれも」と対応関係にある。

(30) これらの本は、どれも面白そうだ。
(31) これらの本は、*何も面白そうだ。

(30)(31)の話し手は、「これらの本」という前提集合を想定しているだろう。このようなとき、外延レベルを

扱う(30)の「どれも」は適格であるが、内包レベルを扱う「何も」は不適格となる。[ix]

（図３）不定全称（外延レベル）



不定全称では、不定語(句)は前提集合の全てのメンバーを指す。図３はそのモデルである。このとき不定語(句)は、前提集合そのものを指す指示語(句)と同等の機能を果たす、と言えるだろう。[x]

以上の考察から、話し手が前提集合を想定するときには、不定語(句)は「外延レベルの疑問用法」「外延レベルの不定個称」「外延レベルの不定全称」のいずれかとして現れる。

ただし、これらは密接な関係にある。言及対象の外延を、疑問として提起すれば疑問用法となり、それを不定のまま文の要素として組み込めば不定個称となる。また、前提集合の全てのメンバーを指定すれば不定全称となる。

(B) 外延レベル（前提集合を想定する）…「どれ」系

・疑問用法 ―――― 太郎君は<u>誰</u>ですか。

・不定個称 ―――― （数名で待ち合わせ）<u>誰か</u>来たようだ。

・不定全称 ―――― <u>誰も</u>がそう言っている。

６．まとめ

本稿では、三尾(1979)にしたがって、不定語(句)の主な用法を「疑問用法」「不定個称」「不定全称」の３種に分類した。しかしこの分類は、あくまで用法に注目したものであって、不定語(句)の諸形態との関係性を捉えたものではない。そこで上記３分類を、三上(1953)の主張する措定・指定を出発点に、より上位の概念である内包・外延という観点から、以下のように再整理することを試みた。

(C)「誰」「どなた」が扱う２つのレベルと各用法

[ix] 内包レベルを扱う「何も」は、肯定文では使えない（*何も…ある）。これは「ーも」が「αも、βも…」のように付加・添加を意味するため、先行文脈（前提集合）を必要とするから、と考えられる。一方、否定文で使われ得る（何も…ない）のは、欠落・不在を表すときには、先行文脈（前提集合）が不要であるからと考えられる。

[x] 前提集合を直示する際には、不定全称の「誰も」は不適格となるが、「どなたも」は適格となる。

(32) {*<u>誰も</u>／<u>どなたも</u>} 飲みに行きましょうよ。

(33) {*<u>誰も</u>／<u>どなたも</u>} どうぞご自由に。

(34) {*<u>誰も</u>／<u>どなたも</u>} 身の回りをお確かめください。

(35) では、{*<u>誰も</u>／<u>どなたも</u>} よろしく頼みます。

なぜ「どなたも」ならば適格なのか。それは「どなた」が敬体であるということが理由の１つだろう。さらに「どなた」の「ど」が、「こそあど」の「ど」であることも、その理由ではないか。つまり「どなた」は、「こそあど」に由来する指示性を備えているため、(32)~(35)の直示でも適切に機能するのではないか。一方で、「誰」は指示性を備えていないので、直示には向かないのではないか。

○内包レベル（前提集合を想定しない）…「何」系

・疑問用法 ――――― あなたは誰ですか。

・不定個称 ――――― （先行文脈なし）誰か来たようだ。

○外延レベル（前提集合を想定する）…「どれ」系

・疑問用法 ――――― 太郎君は誰ですか。

・不定個称 ――――― （数名で待ち合わせ）誰か来たようだ。

・不定全称 ――――― 誰もがそう言っている。

不定語(句)が、内包・外延のいずれのレベルを扱うかは、話し手が“発話時に前提集合を想定するか否か”によって決まる。

前提集合を想定しないとき、話し手は、すでに言及の対象を特定しているのであって、その特定の対象の“内包”が問題となる。したがって不定語(句)は、内包レベルを扱うことになる。

一方、前提集合を想定するとき、話し手は前提集合の“どのメンバーを指定するか”を問題とする。このときの不定語(句)は、外延レベルを扱うことになる（注viii参照)。また不定全称は、外延レベルを扱う用法の１つとして位置づけられる。

「誰」「どなた」は、内包レベルを扱うか、外延レベルに扱うかについて形態的マーカーを持たないが、これらも不定語(句)である以上、当然のことながら、内包レベルを扱う用法と外延レベルを扱う用法を持つわけである。

参考文献

奥津敬一郎(1984)「不定語の意味と文法－「ドッチ」について－」『都大論究』21 号、pp.1-16、東京都立大学国語国文学会

――――(1985a)「続・不定語の意味と文法」『人文学報』173 号、pp.1-23、東京都立大学

――――(1985b)「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』22 号、pp.1-12、東京都立大学国語国文学会

尾上圭介(1983)「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』pp.404-431、明治書院

加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房

野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』ひつじ書房

三尾真理(1979)「疑問詞とその用法」『日本語教育』36 号、pp.73-90、日本語教育学会

三上章(1953)「主格、主題、主語」『現代語法序説』pp.73-154（第二章)、刀江書院

引用資料

井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫

塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』新潮文庫

司馬遼太郎・井上ひさし『国家・宗教・日本人』講談社文庫

曽野綾子『太郎物語』新潮文庫

日高敏隆・竹内久美子『もっとウソを！男と女と科学の悦楽』文春文庫

三浦綾子・星野富弘『銀色のあしあと』講談社文庫

山本周五郎『さぶ』新潮文庫

毎日新聞（1999 年版 CD-ROM）（日外アソシエーツ）